

- I 序論にかえて——最近の Hegel 研究の動向と特徴  
 II ヘーゲルの経済学的研究の内容と評価

- III 主題に即した東ドイツにおける論争の経過  
 IV 結び

## I

本稿の目的は、主題に即して、最近における Hegel 研究の諸業績の成果と問題点を批判的に検討することにある。しかし、批判的に検討するといっても、この方面における最近の諸業績の内容をできるかぎり忠実に紹介しながら、その問題点を明らかにしてゆくことにする。

最近における Hegel 研究の諸成果は、その一つを、Hegel 初期の手稿・論文・断片等の整理・刊行に負っている<sup>1)</sup>。それによって Hegel 思想の内面的発展の

1) Hegel (1770—1832) のきわめて簡単な生涯と著作、とくに本稿と密接に関連するいわゆる社会哲学についての著作の輪郭とその刊行について、ここで述べておくことが便宜であろう。Hegel は 1770 年 Stuttgart に生まれ、ラテン語学校、ギムナジウムを経て、Tübingen 大学の神学科に学び (1788—93)、のちスイスの Bern で家庭教師となり (1793—96)、ついで、Frankfurt a. m. の商人の家に寄偶した (1797—1801)。のち、Jena の大学の私講師となり (1801—1806)、哲学的著作を逐次発表し、1807 年に『精神現象学』*Phänomenologie des Geistes* を公刊した。その後、Nürnberg のギムナジウムの校長兼教授となり、『論理学』*Wissenschaft der Logik* 1812—16 を公刊し、Heidelberg の大学教授 (1816—18) を経て、Berlin 大学の教授となり『論理学綱要』*Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften*, 1827, 1830 および『法の哲学』*Grundlinien der philosophischen Rechts oder Naturrecht und Staatswissenschaft in Grundriss*, 1821 を公刊した。Hegel の死後刊行された全集の別巻として書かれた Rosenkrantz の『ヘーゲルの生涯』*G. W. Hegel's Leben. Supplement zu Hegel's Werken*, 1844 が、『精神現象学』の刊行に至るまでの Hegel の研究資料を示す手稿の一部を Urkunde として巻末にそえたところから、Hegel の初期の研究がはじまるといっている。その後、ベルリンの国立図書館に託された一さいの手稿・日記・断片を整理・刊行することがおこなわれている。Hegel の初期の宗教的・政治的・経済学的研究のうち、宗教的研究は、Nohl の編集した『若き Hegel の神学論文集』*Hegel's Theologischen*

*Jugendschriften*, 1907 によって始めて、明らかにされた。Hegel の経済学的研究は Frankfurt 時代から政治的研究—ドイツ国法論の批判—とやらではじめられたが、1802 年 Jena で、Schelling と共同で発行した『哲学批判雑誌』*Kritisches Journal der Philosophie* に発表した「自然法の学問的とりあつかいにかたについて」*Über die wissenschaftlichen Behandlungsarten des Naturrechts* および同年書かれたと推定される遺稿『人倫の体系』*Das System der Sittlichkeit* が、現在のところまででは、その最初の成果である。『人倫の体系』は、その抜萃が Georg Mollat によって 1893 年に刊行された。また『ドイツ国政論』*Die Verfassung Deutschlands* も Mollat によって 1893 年刊行され、Glockner による『ヘーゲル全集 1927—40』のなかにおさめられている。1914 年以降 G. Lasson が Hoffmeister の協力をえて刊行した『Hegel 全集』は、Jena 時代の未公刊の手稿・講義草稿などを数多くふくんでいる。そのなかで重要なものは、*Jenenser Logik, Methaphisik und Natur Philosophie*, 1923; *Jenenser real Philosophie I* (1803—4) hrsg. von J. Hoffmeister, 1932 (以下本文において *Real Philosophie*; I と引用する); *Jenenser real Philosophie II* (1805—6) hrsg. von J. Hoffmeister 1931 (以下本文においては *Real Philosophie II* と引用する); *Schriften zur Politik und Rechtsphilosophie Hegels*, hrsg. von G. Lasson 1923 (ここには、うゑに述べた「自然法の学問的とりあつかいにかたについて」および「人倫の体系」の全遺稿、「ドイツ国政論」「1815—16 年におけるヴェルテンベルク王国の州議会議事録の批判」および Hegel が晩年書いた「イギリスの改革法案」*Über die englischen Reformbill, 1831* をおさめてある。以下本文において Lasson として引用する) などである。そのほかに、資料集として J. Hoffmeister の編集による『Hegel の発展のための資料集』*Dokument zu Hegels Entwicklung*, 1936 が刊行されている。われわれが Hegel の社会哲学というのは、Lasson の編集した『Hegel の政治・法哲学論文集』におさめられた諸論文、『論理学綱要』のなかの客観的精神の部分および『法の哲学』などを指している。

Lasson の編集する Hegel 全集は今次の大戦で継続できなくなったが、Hegel の手稿・論文・日記・

一貫性を明らかにする努力が高められた。そしてその主要な成果は、第1に Hegel 哲学の背後に、あるいはその基底に、経済学的分析があること、その観点から、Hegel が生前刊行した『精神現象学』、『大論理学』、『歴史哲学』および『法の哲学』などを再反省してゆかなければならないということを示していること。第2に、Hegel 哲学の基底にある経済学的分析は、イギリス古典派経済学と密接な関連があること、具体的にいえば、Hegel は古典派経済学を継承し、発展させていること。第3には、このような Hegel の経済学的分析の成果をひとしく高く評価している点に、共通点をもつといつてよいであろう。たとえば、Bülow は前著の研究(4)<sup>2)</sup>を一層、展開した最近の論文(13)のなかで、「この思想家の大論理学に対応したコメントルがますます必要となっている。というのは、以前の単に、論理的な・形而上学的な、また精神的にむけられた叙述にたいして、Hegel 哲学の社会学的な意味および経済学的な意味を解明すべきである(II S. 32)と述べているし、Lukács もその大著(11)のなかで「ヘーゲルは、フランス革命とナポレオン時代との本質をドイツで最もよく、また最も正しく洞察しているだけでなく、同時にまたイギリスにおける産業革命の問題を真剣に論じていた唯一のドイツ思想家でもある。イギリス古典派経済学の問題と弁証法との問題を関連させた唯一のドイツ思想家である」(S. 25)と述べている。Cornu も日本語版(12)のなかで、Lukács のこの言葉を引用している。Hegel の初期の経済学的分析については、Marcuse(8)がすでに Lukács よりさきに、「Hegel は近代社会のときがたき諸矛盾を洞察したドイツにおける最初のひと」(p. 61)であり、Hegel の分析の「叙述の調子とパトスは marx の『資本論』にいちぢるしく似ている」(p. 79)と評価している。しかしこの方面での劃期的な業績は Lukács の大著であろう。Lukács はそのなかで、Hegel がかれの弁証法を、イギリス古典派経済学、とくに Adam Smith の経済学、市民社会

の諸矛盾との対決および人間の歴史のなかにおける労働の中心的役割から展開したという見解を明らかにしている。「おそらく、Hegel が展開した弁証法のそれぞれの特殊な形態は、市民社会の諸問題、経済学の諸問題にたいするこの批判から生まれたのである」(S. 715)。Hegel は「現実の内的構造、かれの時代、すなわち資本主義の現実的推進諸力を、思惟のうえで把握し、資本主義の運動の弁証法を明らかにしようと努力している。…この批判は、おそらくかれの体系の全構造、かれの弁証法の特徴および偉大さを規定している」(S. 21)。かれの経済学的分析は「Smith 経済学の特定の諸範疇に客観的にふくまれている諸矛盾を追求し、Smith の Horizont をはるかに超えるところにある弁証法的意識の高さにまで高めた」(S. 412)。このように「社会的構造をつねに具体的・経済学的に基礎づける方向におけるこの展開は、(Hegel の初期の—筆者) Jena 時代をもって終らなかった。いな、ひとは、反対に、この傾向は、Hegel のなかで絶えず成長していったことを把握する」(S. 472)。このような Lukács の研究成果に依存し、しかもそれを超えて Behrens (14)は Hegel の経済学的研究を「労働・価値および貨幣の本質ならびに資本家的生産の必然的本質把握に到達した」(S. 416—8)と評価している。

最近の Hegel 研究の、このような成果と意義とを見定めるためには、われわれは、少しくこの方面における研究を回顧してみる必要がある。大ざっぱにいえば、この方面における研究傾向は、Hegel の初期の著作の刊行の時期を反映していることを示すといつてよいであろう(注1参照)。Hegel の初期の著作が知られなかった時代には、Hegel の経済学研究、いな Hegel と経済学との関係は、経済学史の standard な仕事のなかではとりあげられなかった。わずかに Friedrichs が『古典哲学と経済科学』(3)のなかで、Hegel とドイツ歴史学派との関係を取りあげているに過ぎない。この書物は、きわめて線密に Hegel とドイツ歴史学派、とくに Roscher, Knies, Hildebrand の経済学との関係を、それらの書物を対比してあとづけているが、ここでの主要な関心は、Hegel が方法論的に、歴史学派にいかなる影響をあたえたかということにおかれている。その後あらわれた Hegel の社会哲学の諸モノグラフは、Hegel の国家論にその重心がおかれている。そして経済学的研究に関連して注目すべきことは、Mayer, Karl=Moreau の研究(2)が示すように、1802年の自然法についての論文においては、Hegel はギリシャ国家を模範としていたが、のちに『法の哲学』において近代的国家観をとるに至ったという見解である。この点は最近の研究においては改めら

書簡などに、新たらしい資料を加えて、それらを Chronological に配列し、Hegel の思想の全発展をあとづけようとするころみは 1952 年から Hoffmeister の手によっておこなわれている。この新らたな『ヘーゲル全集』G. W. F. Hegel's sämtliche Werke. Neue Kritische Ausgabe. Begründet in neuer Anordnung und Bearbeitung hrsg. von J. Hoffmeister が完成されると、これまでの Hegel についての諸資料は全部網羅されることになるであろう。

2) この番号は、巻末文献目録に示した著者の著書名および論文名の番号に対応し、ページ数は、その著書・論文(雑誌論文であれば、その雑誌の)のページ数をそれぞれ示している。

れている。このような研究の隙間をぬって、Hegel の『法の哲学』のなかで示された市民社会の分析に、高い評価をあたえたのは、『Neue Zeit』1892年に、Hegelの六十年忌によせて一文を投稿した Plechanow<sup>(1)</sup>にとどまるのではないであろうか。かれはそのなかで「Hegelはごくわずかしが政治経済学に従事しなかったが、かれの天才的英知は、ここでも、他の多くの領域におけると同じく、かれが現象の最も特色的な・そして最も本質的な方面を把握することを助けたのである。Hegelはかれと同時代の経済学者たち—もちろん Ricardoもその例外としない—よりも明瞭に、私有に基礎を置いた社会においては、一方の側の富の蓄積が、かならず、他方の側における貧困の成長をとまなうことを理解していた」(No. 9 S. 242. 邦訳 p. 38—39)。Plechanowの『法の哲学』における Hegel 評価と最近の諸研究をともにすれば、われわれは Hegel の経済学的研究についての一定の像をもつことができるであろう。

わたくしは、次章で、Hegelの初期の著作をふくめた社会哲学をとりあつかっているなかで、Hegelの経済学的研究に重点をおいた諸研究、Lukács, Behrens, Bülow, Marcuse にフランスの Hyppolite の研究を加えて、この方面の最近の研究を展望することにする。ここで問題とする Hegel の著作は、おもに初期のものにかぎられるが、それは Hegel の経済学的研究を顕著にあらわしているばかりでなく、のちの著作と区別されざる観点をすでに確立しているからでもある。そして、Hegel の経済学的研究の内容をみるために、それぞれの著作を独立してみることなく、なるべく全体として、かれの思想を明らかにすることを主眼とする。

最近の Hegel 研究のなかで Lukács および Behrens の見解は、東ドイツの哲学雑誌 *Zeitschrift für Philosophie* において、「Hegel 哲学にたいする Marx 主義の関係についての討論」のなかでとりあげられ、批判と反批判とがおこなわれている。この討論は批判者によれば、従来の Hegel と Marx との関係についての諸研究 (Lukács, Cornu, Behrens のほか (29)—(39) に至る巻末文献参照) が両者の親近性・同一性を強調しすぎているが、これを区別し、Marx 主義の明確な規定をあたえることを目指している。論争は 1954 年以来おこなわれ、いまなお継続している。わたくしは、この論争のなかから、現在まで利用できる資料にしたがって Lukács と Behrens の見解にたいする批判と反批判のみをとりあげて、Hegel の経済学的研究の問題点を明らかにしよう。この限定されたかぎりでの論争を第 3 章でとりあつかい、第 4 章で若干の私見を加えて展望を終ることにしたい。

## II

われわれはまえに最近の Hegel 研究の大きな特徴は従来まったく無視されていた Hegel の経済学的研究を、Hegel 哲学の基底として理解しようというところにあるということを見た。そこでわれわれは Hegel の生涯のなかで、経済学の研究がどのような位置と意義をもっているか、またそれがかれの哲学のなかにどのように反映しているかを最近の研究はどうみているかを明らかにしなければならない。

Hegel が Tübingen 大学の神学生としてその学問的生活をはじめてゆく過程において、Montesquieu, Rousseau, Herder および Kant の影響をどのように受けたかという問題を別にして、ここではわれわれは Hegel の主要な関心がどのように形成され、推移していったかを明らかにすることにとどめなければならない。かれの最大の関心は、フランス革命の影響によって人間の共同体が形成されるとしたら、宗教的・政治的になにがおこらなければならないかということであった。かれの青年時代に決定的であったものは、分裂の重要な社会的現象、すなわち宗教的分裂、すなわち一方における既成の・平板な合理主義的な教会思想と他方における私的宗教との対立、あるいは政治的分裂、すなわち一方における硬直し、まひした政治と、自由のうえに建設された生き生きとした一民族の共同体との矛盾であった。指導概念は、死せる・硬直した社会諸形態を生きかえらせることであった。そしてそのような問題に答えるものは、Hegel においては古代ギリシャと国民宗教として復興さるべきキリスト教であった。

Hegel の神学論文はくりかえし、個人と、個人の資質をもはやみたまず、市民の積極的政治利益を消えうせしめた疎外された制度として存続している国家とのあいだの真の関係はなんであるかを尋ねている。国家は個人の意思に依存する。国家は個人の権利と義務を制限し、その成員を全体の存続をおびやかす内的・外的危険から守っている。国家に対立するものとしての個人は人間としての譲渡できない権利をもっている。これらの個人に国家は、いかなる事情にあらうとも干渉できないと考えていた。そしてその理想をギリシャのポリスにみいだした。

しかし調子はしだいに、Hegel の生涯の同じ時代いな同じグループに属する著作のなかですでに変化した。かれは自己の完全な発展を制限する社会的政治的關係をうけいれることを、人間の歴史的運命と考えるようになった。ギリシャでは、個人と国家とは『自然的に』調和していたが、しかしひとは個人を犠牲にしていた。という

のは、ひとは意識的な自由をもっていなかったし、社会過程の主人でもなかったからである。この初期の調和が『自然的』であっただけに、それだけ容易に当時の社会は、そこに支配していた制御できない力によって崩壊した。そして「財産の安全を保証する権利」(Theol. S. 223)がいまや近代の世界となった。かれはこのように歴史の進歩における社会制度の役割の分析に移っていった。

宗教的問題にたいする Hegel の回答は、神学の学生のものであった。かれは、キリスト教を国民宗教に転換させることによって、世界史のなかで人間に新たに絶対的中心をあたえ、生活の最終目標をあたえる根本的な機能をもたらしと考えていた。しかし Hegel は、福音は本質的には社会的・政治的網からはなれた人間としての個人に訴えるものであるから、その本来的目標は、個人を救うものであって社会や国家を救うものではないと考えるに至った。それゆえ、その問題を解決するのは宗教ではなく、また自由と統一を回復する原理をあたえるものは神学でもない。その結果 Hegel の興味は神学的なものから哲学的問題へ、そして現実の政治問題、経済問題へと移行していった。

Frankfurt の時代 (1797—1800) は Lukács によって青年 Hegel の発展のなかでおこった危機的移行の時代とみられている。このことは、かれの市民社会への適応と同時に歴史的弁証法の成立がつぎのように、すなわちこの段階において革命的共和的傾向を撤回し、社会認識の成熟が進むことによっておこなわれた客観的・観念論的弁証法への移行への決定的なものとして Lukács は、Frankfurt でおこなわれたイギリス古典派経済学の研究をあげている。従来無視され、またそれが Hegel が偶々『家父長的金権的政治の都市』Frankfurt に来たことによってはじめられたという外在的要因に帰せしめられていた Hegel の経済学的研究<sup>3)</sup>が、ここではじめて Hegel 研究の歴史のなかで綿密な研究に値いするものと認められたのである。

Büllo (13) もまた、この時期における Hegel の古典

3) Hegel の経済学的研究の動機について、Rosenkranz はつぎのように理解している。「官吏であった両親のもとをさった Hegel は、ある牧歌的な大学都市へ来た。昔ながらの家父長的貴族政治の支配している Bern を去って、いまやかれは商業的金権政治の都市に入ったのである。同時にかれはふたたび政治的発展の直接的舞台に接近することになり、それが政治的発展にたいするかれの関心をいちぢるしく高めた。とくにイギリスにおける営利と所有との関係がかれをひきつけた。というのは、1 つには、その一般的特徴が前世紀を研究するのに、理想的な状態を提供してい

派経済学の研究の意義をつぎのように高く評価している。「これまで、かれはギリシャの理想、後期ローマの崩壊期を描いたところでは経済を明確に否定的に判断し、経済を利己的に規定された私的領域(法的に『私的人間』の出現は、かれには Polis の精神に対立して衰退の徴候としてあらわれた)と観察していたが、かれはいまや経済をもっと肯定的に評価し、経済がかれの問題となり、かれはそれによって徐々にしかも古い見解にあともどりすることがあっても、生活の社会経済的領域を以前とはまったくちがう規準でとりあつかうようになった」(18)の II S. 5)。

たしかに、大陸での亡命生活を余儀なくされ、Montesquieu の弟子の一人と自称する James Steuart の経済学は、その理論構造からいって古代経済社会と近代経済社会とを対比し、近代社会の優位を明らかにし、そして近代社会の Political Economy を問題にしているところから、これから影響をうけた Hegel の経済学研究が、市民社会の問題にむかった意義を肯定することができるであろう。Hegel の伝記を書いた Rosenkranz によって、Hegel の Steuart 研究は 1799 年 2 月 19 日から 5 月 16 日まで続けられコメントールを書いたことが明らかにされているが、そのコメントールは Rosenkranz がみることができただけで、いまや紛失されてみることができない。Rosenkranz はそれについてつぎのように書いているが、それがいまわれわれの利用できる唯一の資料になっている。

「市民社会の本質、欲望と労働、分業と諸身分の資力、救貧制度と警察制度、都制等々にかんする Hegel のすべての思想は、けっきょく Steuart の国民経済学の解釈的注釈およびそのドイツ語訳に集約されている。かれはその注釈を 1799 年 2 月 19 日から 5 月 16 日までのあいだに書きあげたが、それは今日完全に保存されている。そのなかには政治や歴史にかんする多くの深い洞察や鋭い注意書きがみられる。Steuart はマーカンティリズムの創始者の一人であった。気高い情熱をもって Hegel は、自由競争の真只中にあり、機械的な労働に涸渇せんとしていた人間の心情を救わんと努め、それを維持せんと欲した」(Rosenkranz, S. 86)。

Hegel のイギリス社会にたいする関心はその経済学にとどまらずイギリスの議会の救貧税の論戦についての新聞の書き抜きをつくったことによっても明らかにされ

たからであり、2 つにはヨーロッパのいかなる国も営利と私有財産の諸形式がイギリスにおいてのように多面的に形成されていなかったからである。』(Rosenkranz: ebenda, S. 85)

るが、晩年に至るまでその関心が衰えず、逆にますます強まったことは『法の哲学』のなかで (§ 189), Stuart, Smith, Ricardo, Say の名をあげているところからも、また死没の前年の 1831 年にイギリスの Reform-bill についての 1 論を雑誌に寄稿しているところからも窺える。

このような Hegel のイギリス古典学派にたいする関心は Jena に移ってからますます深められ、Jena の *Real Philosophie* のなかには Adam Smith のドイツ訳があげられていることから明らかにされる (*Real Philosophie* I. S. 239)。

このようなイギリス古典派経済学についての関心と市民社会への問題の対決から Hegel の経済学的著作『自然法の学問的とりあつかいにかたについて』の論文と『人倫の体系』が生まれた。『人倫の体系』は実践哲学のあらゆる現象を体系的・弁証法的に整理し、それらの現象を絶対的人倫 *die absolute Sittlichkeit*, すなわち一民族の生活の枠のなかで描く研究を示している。

Hegel はこの問題を経済社会よりはじめ、経済はまず感性的・直観的な欲望よりはじめる。ここにおける直観は個々人の内部に存する感情 *Gefühl* であって個人によって普通的な一つの全体すなわち階域 *Potenz* をかたちづくる。この感情はまず主観と客観とに分離せしめられる。この分離の感情が欲望 *Bedrűfunis* である。この主観・客観の分離を否定するところのものが労苦 *Beműhung* または労働である。欲望においては欲望感情の主観的直観と、その欲望の対象として外在する財としての客観的直観との分裂があり、主観においては客体または対象はまだ観念的な規定にすぎない。この秩序を主観のなかに実現し媒介するところのものが労働である。労働によって観念体の客体が現実化される。すなわち労働によって現実の財としてあたえられ享樂 *Genuss* において止揚される。そして主観と客観とが統一されるのである。

このばあいの労苦または労働は、たとえばわれわれが樹上における果実を欲するとき、これを充足するために樹にのぼり、それをもぎる労苦のようなものである。この欲望と享樂との差別を直接的に止揚する労働を意味する。しかしこの階域からさらに進むと、人間労働の本来的な形態があらわれる。すなわち労働がまず客体を破壊しこれをさらに新しい客体とおきかえる労働があらわれる。この労働は直接に欲望と享樂とを結びつけるのではなく、そこには独自の労働工程が開始される。すなわち労働は自らまず客体を消費し、しかしてそこに新たな客体を生みだす。欲望と享樂とは労働行程によって阻止され、直接的な感情的直観としてあらわれずに観念的なものとなる。この結果労働は 3 つの小階域にわかれる。

1) まず客観にたいする主観の関係すなわち占有 *Besitzergreifung* の関係を生ずる。占有された物は労働によって破壊されるものであるゆえに、これは感性的な欲望関係ではなく観念的な規定である。

2) つぎに労働の活動、すなわち占有された客体の形態的(形式的)破壊がおこなわれる。これは客体それ自身の破壊ではなくて単に形態の破壊であり、客体の実質は新たな生産物のなかに残留するのである。

3) つぎに生産物の所有が達せられる。この所有された物は素材としては第 1 の占有によりまた形式としては形式の破壊と創造とをおこなう労働活動によって再び生産的に破壊され得る可能性である。また同時にまったく観念的な享樂となる可能性でもある。欲望—労苦—享樂において感性的欲望であるものが、この階域においては感性よりはなれる意味において、より観念的な占有となり、物の側からいえば、より客観的な存在となる。またはじめの労働は、感性的享樂のための労働であったものが、客体のなかに主観的活動を具体化する現実的・客観的労働となり、つぎに感性的享樂であったものが観念的な所有となったものである。

ここでの観察の傾向はこのような労働の例からも明らかのように、このような個別的労働においても個人の客観世界にたいする関係だけでなく、しだいに超個人的な社会的関連をとりあつかうことにむかっている。労働の個別性は道具において止揚される。「道具において主体は自己と客体とのあいだにひとつの媒介 *Mitte* をつくる。そしてこの媒介は労働の現実的な理性 *Vernűftigkeit* である。」同時にかれの労働は個別的なものであることをやめる。労働の主観性は道具のなかで普遍的なものにたかまる。このように暗示された意味において『人倫の体系』はあらゆる精神的・社会的実質をそれらのなかにあらわれる段階と普遍的なものとの結びつきの特殊な様式にしたがって全体に組み入れ、そして一種の社会的秩序体系をつくりあげようとしている。

Hegel は労働の弁証法の継続において社会的に決定的なことは労働が多数の個人の活動となる段階である。ここで Hegel が Adam Smith から学んだ労働という国民経済学的概念が達成される。ここで個別性は消滅し、普遍者のなかに摂取されると最近の諸研究は考える。すなわち Hegel は Smith の国富論、労働概念の摂取をえて、人間は労働によって外化するが、また労働は人間を直接性から一般性へとすなわち社会的人間へと高める基盤であると洞察した。この分業の社会は『欲望の体系』*Das System der Bedrűfnisse* とよばれるが、このように人間の労働が抽象的・普遍的となることによって人

間と富の不平等が生まれ、この矛盾を克服する統治の体系として『欲望の体系』『正義の体系』『教育の体系』をあげ、自由政治の体系から権威政治の体系まであとづけ、最後の段階で人倫共同体の形成を考えようとしているのである。この発展はさらに Jena の *Real Philosophie* のなかに顕著にあらわれる。

ここでわれわれの注目に価いするところは、Hegel が Tübingen, Bern 時代にいだき続けてきたギリシャにたいする理想が消え、近代市民社会をその進歩性において認めたことである。絶対的人倫は一民族全体のなかの生活の神化である。特殊と普遍とはここでは同一のものになっている。絶対的人倫は主観的なものそれ自身における恣意の否定をふくんでいるが、しかし人格性の否定ではない。人間性の開花と共同社会は、Hegel によれば自己を疎外するものではないからである。『人倫の体系』と同年に発表された『自然法についての論文』は、このような『人倫の体系』の成果を前提としてかれの歴史的方法を対立させている。

『人倫の体系』を書いた 1802 年に *Kritisch Journal* に Hegel は『自然法の学問的とりあつかいかた』を発表した。そのなかで、かれは近代の自然法の 2 つのとりあつかいかた、すなわち経験的と形式的と区別される 2 つのものに、それぞれ 1 章をあてて批判し、そして第 3 章ではそれらに、絶対的とりあつかいかた、すなわちかれの歴史的、また精神史的な観点と、かれの固有の社会哲学的な観点とを対比させた。経験論方向についての章は、かれは名をあげてはいないが、Thomas Hobbes のことが考えられている。

自然状態を人倫的混沌として抽象化しブルジョワ的存在の擁護を目的として混沌から救うものとして契約にもとづいた文明状態へ移ることを厳密に合理的に導いた Hobbes の自然法の批判においては、問題の歴史的・有機的とりあつかいかたを目的とした仕方が規準となっている。非歴史的な・各種の定性から人間関係のひとつの規定性のみをとりあげるあつかいかたの例として、かれはまた自己保存本能を人間的存在の一般的規準にたかめた見解をとりあげている。

第 2 章では、形式論的とりあつかいかたの典型的代表者として Kant と Fichte とに狙いをつけ、しかしまた他の代表者たちをも考えている。Kant の倫理的形式主義にたいする批判が中心になっている。Kant は経験的な個人意思そのものの根底において先験的意思なる *volonté générale* を認め、それに社会契約思想の根拠をもとめた Rousseau の系統に属するものといつてよい。この点で Kant は Hegel のいうように自然の先天

的取り方をとるものであり、けっきょく上からの方法を代表するものといわなければならない。

真に宏く『絶対的人倫』をとりあつかう第 3 章は、かれの思惟の一貫性において、*dramatisch* な重みで、すでに Rosenkranz が明らかにしたように、Hegel の歴史的・弁証法的思惟性の理解のために、Hegel が『精神現象学』のまえに書いたもののなかで最も重要なものである。Hegel はその章のなかで計画的な 1 節を述べている。「絶対的人倫の総体は、ひとつの民族にほかならない」。そしてかれがつぎのように書いているときには、このテーゼの弁証法的解釈への開始であるかのごとき感じをおこす。「われわれは絶対的形態または無限性の多様にあらわれたものを、その必然的モメントにおいて把握し、そしてそれらのモメントが絶対的人倫の姿態 *Gestalt* をいかに規定しているかを示すであろう」。これによって個人の地位は、かれの民族に属していることが示される。そこで Hegel は、絶対的人倫を経済の領域に対決させ、この叙述のなかで、国民経済学の論理的諸萌芽を提拱している。さらに Hegel は経済の世界にたいして否定的態度を堅持し、絶対的人倫の体系のなかでは、経済的なものは人倫的なものにたえず従属しなければならず、したがって「経済的なものが量的関係以上に高まり、その本性が明らかにするよりもつねに大きな差異と不平等の形成が阻止されること」を強調している。経済が生活の絶対的なものに高まることは、配慮されなければならない。「その本性によって否定的なものは、いつも否定的でなければならない」。そしてそれ自身独立的な力を構成すべきではない。この非有機的本性の絶対化、特殊な自我のこの世界は、それが全体的に利己的に展開するならば、人倫的混沌に導くであろう。この関連においてかれはここで明確に古代ではなく、市民社会の到来によって特徴づけられた近代の社会的状況を眼前にしているのである。そして身分論においては絶対的人倫の理想図を古代ポリスのそれにおき、そのなかで近代の社会関係を暗示しながら展開している。Bülow はここに歴史を弁証法的関連でとらえようとする Hegel の問題を見ている。

Hegel における歴史的なものへの転回は、つねに人倫的総体の問題を新たらしくその広汎な発展のなかでよびおこす。とにかく「かれは歴史的方法と弁証法的方法とを相互に結びつけようとするときには、かれは体系と歴史とをひとつに把握しようとする必然性のまえにおかれたことを知っている。このように作用するものは、ここにおいてかれは既成のもの *positive* を歴史的発展として、理念の展開として歴史における理性を把握すること

である。その結果もはや一方の側における理念、理性および自由、他方における現実性、歴史および必然性とはもはや対立物を形成せず、終局的には歴史的理性と真理以外には、いかなる歴史的理性も歴史的真理も存在しない。

歴史が、『時代の外在化した精神』であり、理性と歴史、観念性 *Idealität* と既成性 *Positivität* とが相互に妥協せられるとすれば、そこから3つの体系的概念が生まれる。第1に、必然性、対立または矛盾を弁証法的に全体のなかにとり入れること、第2に、社会の全体のなかで恣意、主観的なものすなわち経済の領域でおこったものにひとつの活動の余地をあたえ、したがって恣意自体を自由の条件として積極的な価値をおくこと（低い階域はもはや制限ではなく、人倫的総体の生き生きとした運動の条件である）そして第3に、時代の概念を、正当に実証化され、観念性 *Idealität* をひきおろし人倫的なものを減すモメントとしての性格を、解放史的歴史把握の仕方、進化論的に吸みとり創造するものとしての時代の特徴におきかえることであった。」(13)のII S. 18)

1803—4年および1805年のJenaにおける *Real philosophie* の講義のなかで、かれは人倫の体系の諸概念、とくに労働、道具、機械、のちに市民社会とよばれる経済社会の分析を一層深め、そして意味深く把握した。労働過程は統一のいろいろのタイプ——これらのタイプに対応す社会諸形態、『家族』、『市民社会』、『国家』にわかれる。この変化を通じて労働の様式は、Smithの分業論を踏襲するHegelによれば、『人倫の体系』でも明らかにしたように、自分の慾望を充足することを目的とする個人の特定の作業を市場のために商品を生産する『一般的労働』へ変化する。ここでは「人はもはや自分の使用するものをつくらない。あるいは自己の労働で得たものは使用しない」(*Real Philosophie* I S. 238)。労働の生産物は「もはや主体にとっての欲望でなく、剰余であり、したがってその使用関係は普遍的なものであり、この普遍性を実在性においてみるならば、それは他人の使用関係である」(*Ebenda*, S. 438)。この社会では諸対象がもはや死せるものではなくその全体において主体の自己実現の領域に属している。労働によって形態をあたえられた対象は、そのなかに主体の必要と欲望をみたすことができる主体の1部となるからである。他方、労働の剰余が交換されることによって、人はそのなかで個人としてあらゆる他の個人に対抗している個別的な存在であることをやめる。かれは共同社会の1員となる。個人はかれの労働によって普遍的となる。というのは労働はその本性そのものから普遍的活動でありその生産物はあらゆる個人のあいだで交換されるからである。

Lukácsは、Hegelがこのような労働から出発する社会把握をAdam Smithからうけついで労働概念を人間の社会的・哲学的に評価したこと、そしてHegelが社会的分業のSmithの理論のドイツ訳を明示していることから、Steuartの段階からSmithの経済学への全面的移行を特徴づけている。ここではSteuart, Smithの影響がどのようにHegelの著作のなかに反映しているかは、わたくしがかって別稿『Hegelにおける古典派経済学の把握』(『経済研究』第7巻第4号)のなかでふれたように重要な問題である。

Lukácsが、Steuartの経済学はHegelの経済学的研究とくに労働の問題を現実的に提起しないとし(S. 230)、Smithの影響を決定的なりと推測し、HegelのSmith段階への全面的移行を結論しているが、わたくしのみるところでは、これまでのHegelの市民社会についての叙述は、むしろSteuartの経済学の反映とみるべきであろう。このような問題からはなれてHegelにおよぼしたSteuartの影響については従来、Hoffmeisterが“*Dokumente...*” (註1参照)のなかでRosenkrantzの伝記的資料に加えてつぎのように注意しているのが唯一の例外である。「われわれはSteuartとの対決のあとを *Real Philosophie* (I. S. 236 f. II. 213 ff) およびHegel自身によってのちに公刊された著作とくに『法の哲学』、いな『精神現象学』(1807, S. 441 ff 国家権力と富について。Steuartのドイツ訳II, S. 243 ff)にむかわなければならない。ここではその後あらわれたAdam Smithの主要著作——それをHegelはJenaの時代ではじめてとりあげているが(*Real Philosophie*, I. S. 239 参照)——におけるよりもっと明確に、かつ飾りなく近代経済政策の悪魔的様相が述べられている。人間はここでは行為と勤労の活動の車輪以外のものではない。かれの価値は、かれの富または企業家の役にたつことによって規定されている。一方、富者は、自己の幸福の視点からかれのプランを遂行し、かれの企業の利潤のために、「労働者は自己の欲望の奴隷」(I. 52)であることを考慮するだけではなく、また「ヨーロッパ的自由の精神を害することなく」直接的奴隷保持(IIの11と40)をすすめている。問題はかれがいうごとく(II. 170)、貧民にいかに食をあたえるかではなく、1国民の富が外国の犠牲においてみずから養うことによって増大する方法が問題なのである。Hegelの民族精神および国家思想に関連して最も特徴的なことは、(II. 4)の注意、すなわち社会を規制するにあたって政治家が選ぶことのできる最善の道は、政治家がかれの民族がつねに利己心以外の根拠によって行動し、みずからが活動的であることを証明するなどというあや追従をいわないことで

ある。利己心の代りに祖国愛をよく治められた国民の行為の推進力にすべきであるとするならば、そのことによってすべてが失われるであろうと、かれは憂慮している。被統治民の愛国心は——それは政治家においては全能であらねばならないと同じく——余計なものである。ここで Hegel がすでにこの資本家的原理の対決において根本視点を、したがってまた『法の哲学』の構造の根本特徴——そのなかで国家がまったく明確に（すでに *Realphilosophie* におけるように）経済の主人として説明されている——が得られたと推定することは誇張ではないであろう」（Hoffmeister: *ebenda* S. 466-7）。

ところで、Hegel は市民社会について、さらに続けて述べている「個人は自己の欲望をかれの労働によってみたすのであるが、かれの労働の特殊な産物によってみたすのではない。『特殊な生産物』はかれの欲望をみたすためにそれとことなるものにならなければならない。」（*Real Philosophie* I. S. 238）特定の対象は労働の過程において普遍的なものになる——それは商品となるのである。したがって普遍性は労働の主体、すなわち労働者とかれの個人的活動を変化させる。かれはかれの特定の才能と欲望とを無視することを余儀なくされる。労働の生産物の分配には『抽象的普遍的労働』以外は問題にならない。「各人の労働はその内容からみれば、全員の必要にとって普遍的なものである」（*Ebenda*, S. 238）。労働はこのような普遍的活動としてのみ価値をもつにすぎない。その価値は「個人にとっての労働であるところにしたがわず、すべてにとっての労働であるところにしたがって」（*Ebenda*, S. 238）決定される。この抽象的・普遍的労働は市場における交換関係によって具体的な個人的需要に結びつけられている。交換によって労働の生産物は、抽象的労働の価値によって個人のあいだに分配される。それゆえ Hegel は交換を『具体的物への復帰』（*Real Philosophie* II. S. 215）とよんでいる。それによって社会における個人の必要がみたされるからである。あらゆる『つくられたもの』に共通なものそのなかでそれらの平等性が表現されるものは諸商品の『一般性』としての社会的実体価値である。「物としてのこの価値自体は貨幣である。」（*Ebenda*, S. 215）とかれは把握している。「その普遍的概念はいろいろの労働と同じくすべての人に一般的なものとして表象される物でなければならない。貨幣はこの物質的実体的な概念であり、統一の形式である。すなわち欲望の対象となるすべての物の可能性である。」（*Ebenda*, S. 216）

ところでこのような交換社会は、どのような発展をひきおこすであろうか。

Hegel はこの点において労働の規定から出発して道

具機械の発展によって、労働が個人の自己実現から自己否定に変化することを示すとともに、他方個人が抽象的労働という魔力 Demon に完全に従属することによってあとづけている。

前の点について。人間は労働によって自然の客観的合法則性を発見し、かくれている客観的な因果関連をみいだして協力させ、分業—道具—機械へと発展してゆく。道具と機械との区別を単に労働用具の分化と考えた Smith にくらべて Hegel はこの点で一層の前進を示している。Hegel は分業、道具、機械によっておこる運動について書いている。

すでにみたように道具を使用することにおいて人間の活動はなんらか一般的、形式的なものとなる。しかし「人間の活動は残る」。機械によってはじめてこのなかで質的变化がおこる。機械は人間自体からこの形式的活動を揚棄し、それをかれにたいして全体的に活動させる。しかし「人間が自然にたいして強制するところのかれの偽瞞はかれがその個別性のなかにとどまるかぎり、…やがて人間自身にたいして復讐してくるのである。すなわち人間が自然を抑圧すればするほど人間が自然からかち得るものは、より価値低くなるのであって、人間はいろいろの機械で自然を加工することによって、自己の労働の必然性を揚棄せず労働を自然から遠ざけ人間がもはや自然に生き生きとむかわない。」労働すること自体にたいしてのみ労働の必要を減少させるが、しかし個人にたいしてはそうではなくむしろ労働を増大させる。というのは労働が機械的になればなるほど労働はより僅少な価値しかもたず、人間はこのようにしてますますよけいに労働しなければならないからである」（*Real Philosophie* I. S. 236）。この点を Marcuse は、Marx の『資本論』の叙述と調子とバトスがいちじるしく似ていると評価し、また哲学史的に『精神現象学』の成立と構造をあとづけた(9) Hyppolite が、Lukács の書物に刺戟されて Smith を超える Hegel の功績と指摘している(16)。

このように労働が機械の利用によって主体の自己の実現から自己否定へ変化すると同時に特定の欲望と労働、全体の必要と労働とのあいだの関係は測り知れざる盲目的相互依存の形態をとる。抽象的労働と交換によって樹立された対立的個人の結合は、かくて社会性と相互依存性の一大組織を、すなわち死のなかにみずからを動かす *sich in sich bewegendes Leben des Toten* をさす。これは盲目的に本能的に動きまわり、恐ろしい獣であるからたえずがっちりと支配し抑制することが必要である」（*Real Philosophie* I. S. 240）

このような市民社会の様相は 1805—6 年の *Real Phi-*



losophie ではもっと陰惨に描かれている。「個人は全体者の偶然な完全な混乱に従属させられている。それゆえに大衆はまったく鈍化（磨滅化）されており、不健康で、危険な、しかもその熟練にかぎられた工場労働・マニユファクチュア労働・鉱山労働にまで墮落させられている。そして産業の諸部門は一大階級の人々を雇っているが、これらの諸部門は他国における流行〔の変化〕や物価の低落などのために一度に涸渇してしまい、この全大衆は途方に暮れざるをえない貧困に身をゆだねるのである。

巨大な富と貧困との矛盾がはじまり、貧者はその境遇を改善することができない。富は巨大な力となる……富と貧困とのこの不均等、この需要と貧困は意思の最大の墮落、内的革命と憎悪を必然的にもたらす。」(Real-Philosophie II S. 232-3)しかしこのような Hegel のすぐれた経済社会の分析もドイツの後進性のゆえに剰余価値をみいだすことはできなかつたと Lukács は Hegel の経済学に制限を加えている。Behrens(14)は、Lukács、によってこのように展望された Hegel の経済学的分析に立脚して、「かれの弁証法の力によって、Hegel は Smith, Ricardo を超えて価値および貨幣の本質に進むことができた。しかしそれだけでは充分でない。観念論的弁証法論者ではあったが、Hegel は労働、価値および貨幣の本質ならびに資本家的生産の必然的發展傾向の把握に到達することができた」(s. 416-8)と総括している。

### III

以上、われわれは Hegel の経済学的研究についての最近の諸研究の成果を概観した。ここでわれわれは、序論に述べたように、ふたたび東ドイツの論争にたちかえり、最近の Hegel 研究の代表的著作である Lukács の書物および Behrens の論文にたいする批判および反批判をめぐる論争のみをとりあげよう。Lukács はかれの書物の東ドイツ版の序文のなかで、この書物が第2次大戦で生活の方向を失ったドイツ国民にたいする羅針盤の意味をもつことを強調しているが、このことは、Hegel を生みだしたドイツ国民は新たらしい社会の建設に勇気をもつ期待がこめられていた。他方、Stalin 以来ソ同盟のドイツ古典哲学にたいする低い評価が存在していた。この2つの潮流が、たまたま、Lukács の書物にたいして衝突し、批判と反批判とが激しく闘はされる根底に潜んでいる。われわれはこのことを念頭に入れておかなければならない。

Gropp は、哲学誌上で2回にわたる長文の論文「マルクス弁証法の Hegel 観念弁証法にたいする対立」(24)を発表し、Hegel 研究の最近の諸著をとりあげて批判し

た。この論文は長文の代りに趣旨はきわめて簡単である。

Gropp の研究は3つの部分からなりたっている。第1部ではつぎのような抽象的命題がつけられている。「理論と方法とは統一を形成する。唯物論的把握にしたがえば、理論と方法との関係において、理論は規定的 das Bestimmende であり、方法は従属的 das Abhängige であり理論は方法の基礎であり」(S. 73)、したがって「理論が方法を規定する」(S. 74)。この把握にしたがえば、唯物論と観念論とは真正面から対立する。このいわば世界観的対立とならんで方法に副次的に形而上学と弁証法との対立がある。方法としての形而上学は、17・18世紀の機械学の発展の一面性に制約されて、事物を相互に孤立させ観察し、運動・変化および発展をみない点において不十分な把握 unzugänglich であるがまた、他方に客観的弁証法をみとめない点において破壊的 zerstörende な方法である。ここに観念論に対する形而上学の根本的な関連がある。Hegel の観念論は、当然、形而上学的方法をふくんでいる。かれのつくりあげた弁証法は形而上学の内部での弁証法である。唯物論における形而上学は歴史的欠陥、その発展によって克服さるべき不充分さを示すにすぎない。

このような見地にたつて、Gropp は第2部において、Hegel の体系と弁証法とをとりあつかい、Hegel の理論の内容と方法を批判し、第3部においてマルクス主義の成立をとりあつかっている。Hegel との関連でいえば Gropp は、「マルクス主義の弁証法はその成立を Hegel 弁証法に負うものではなかつた。それは Hegel 弁証法から生まれたのではなく、Hegel 弁証法に対抗して展開されたのである。唯物弁証法は、唯物史観と科学的社会主義から生まれたのである」(S. 344)ことを明らかにしようとしている。

このような Gropp の主張の根拠は、その端緒を Stalin(26)について、『ソヴィエト大百科』(41)において確立された Hegel にたいする評価にもとづくものであった。『ソヴィエト大百科』はドイツ古典哲学をつぎのように評価している。「唯物論にたいする闘争は、Kant (1724—1804)、Fichte (1762—1879)、Schelling (1775—1854) および Hegel (1770—1831) の著作のなかに最もはげしく表現されている。それらのひとびとの哲学はフランス・ブルジョア革命および18世紀のフランス唯物論にたいする貴族的反動であった」(CTP. 85-Deutsch, Reihe Länder der Erae I Deutschland S. 277)し、「1800年以前およびそれ以後のドイツ哲学は、フランスにおける封建秩序の革命的顛覆に直面したドイツの貴族およびかれらに卑屈で、弱くかつ臆病なブルジョアジーの恐怖と憎悪を

表現している。」(CTP. 85 S. Deutsch, *ebenda* S. 277)そして Hegel について「Hegel は弁証法を、非弁証法・形而上学的唯物論との闘争において利益をもたらすかぎりにおいてのみ、加工したにすぎない」(CTP. 309, Deutsch, Sonderabdruck; Hegel S. 11)と。この見解にもとづき Gropp は「Marx 弁証法と Hegel 弁証法との結びつきは単に形式的性格をもつにすぎない。」(S. 363)と結論し、マルクス主義の成立にとって、フランス唯物論の地位を高く評価している。このような立場から Gropp は最近の Hegel 研究のなかで Cornu(12), Bloch(39), Lukács(11), Behrens(14)の諸研究をとりあげ、つぎのように批判している。当面のわれわれには Lukács と Behrens とにたいする批判のみが必要である。

Lukács の見解によれば、Hegel は経済学と哲学の結合において、Marx の直接の先駆者であり、Hegel の観念論は副次的なものとしてとりあつかわれていると Gropp は批判する。事実 Lukács は Hegel の観念論を一方では、なにかしら形式的なものであると明記し、他方ではそれを正当化しようと努力している。たとえば Lukács はつぎのように書いている。「Hegel の弁証法への第1歩は、ただ観念論的な仕方でのみ実現することができた」(S. 505)と。この方法で Lukács は、観念論と弁証法との関連を転倒している。かれは抽象的な「弁証法への1歩をふみだすことを前提として観念論は忍んで受け入れるべき制約である」(S. 505)と述べている。

他方では Lukács はつぎのような言葉で Hegel の観念論を擁護している。「あとの観点から Hegel の思惟のこの制約を発見し、批判することはきわめて容易である。その当時のドイツの政治的・社会的・経済的環境のなかで、Hegel 哲学のような包括的な・偉大な哲学が急進的・民主主義的基礎のうえで成立することがいかに不可能であったかをみぬくことはもっとも困難である。」(Lukács, S. 470)ここで直接に Hegel の反動的な政治的態度が正当化され、その態度が Hegel の偉大さに帰せしめられている。Hegel の政治的保守的な、反民主主義的態度とまちがった・使用できない・観念論的弁証法の関連は、その意味が誇張されている。Hegel の弁証法が Hegel の反動的な政治的態度に負っているというようにねじまげられている。Hegel をあらゆる仕方で正当化する・この努力は、Lukács の書物のいたるところでみられる。Gropp によれば Lukács において Hegel の観念論が副次的・形式的であると評価されているため、Marx, Engels の唯物弁証法への発展は、Hegel 弁証法の継続的発展としてあらわれるが、このことは誤りであるということが批判の第2点をなす。Marx による Hegel 観

念論の批判は、Lukács によれば、Hegel において存在し、可能であったよりも高い経済学の認識に基礎づけられている。」(S. 697) Lukács の定式の多くの比較級から明らかなことだが、観念論的弁証法の唯物弁証法による『克服』は、和解しがたい闘争において問題とされずに、単にそれ自身の展開として問題とされたにとどまる。唯物弁証法は観念論的弁証法に比較して対立的なそれとしてではなく単に『より高次の弁証法』としてあらわれているにすぎない。唯物弁証法は、いわゆる高次の経済学的認識から生まれたのである。Lukács では比較級が、Marx の Hegel にたいする単なる量的関係が——A. A. Schdanow が、F. G. Alexandrow におけるそのことを批判したと同じく——生まれるにすぎない。Lukács によれば『唯物弁証法』は、『客観的観念論の弁証法の真理』として述べられているが、それによって Hegel の観念論的弁証法とマルクス主義的唯物弁証法との間にはきわめて密接な親縁性 *Verwandtschaft* が存在する。唯物論と観念論とは Lukács にあっては、けっして和解しがたい世界観的対立としてはあらわれていない。

かくて Gropp は、「Lukács がかれの *Junge Hegel* において追求した基本線はまちがっている。基本線がかれをかりたてた諸関連の、とくに明らかな歪曲はこのことを示している。…かれ自身の Hegel 解釈は Marx および Engels が実現した哲学上の急転回を消滅させることに帰着する」(S. 95—6)と結論づけている。

Gropp は続いて Behrens の批判に移り、Behrens は第1にマルクス主義の成立にとっての、いわゆる Hegel 主義の支配的影響については Auguste Cornu に依存していると指摘し、さらに進んだ叙述においては、Lukács の把握を無批判的に踏襲しているばかりでなく、簡単化——そのなかで Marx にたいする Hegel の先駆性をもっと強く力説されている——に到達しているとみている。そして Behrens の Hegel にたいする積極的評価にたいして「これまで世界中の Marxist たちは、労働、価値、貨幣の本質および資本家的生産の必然的発展傾向を把握したのは Karl Marx の偉大さに属するという見解をもっていた。Behrens は、これらのあらゆる点において観念論的プロシヤ国家の哲学者 Hegel に優位性があらわれるということのをわれわれに知らせている。」(S. 98)

Gropp は Behrens のなかにはっきり見いだすのは、Hegel を Marx 主義の父としてみようとするドイツにおける広まった誤った見解にもとづいておりと結んでいる。

Behrens(44) は Gropp の批判に答え、自説がいかなる関連のなかで述べられたかということのを再録し、自己の

真意は、Marx が、事実上 Hegel の経済学的研究を継承したのではないけれども、その研究を背後に潜めた Hegel の研究から出発したため、古典派経済学を批判することができたということを強調し、自説を擁護している。

Albrecht<sup>(47)</sup>は Lukács の書物が「ドイツ古典哲学の遺産の創造的・批判的加工の最も重要な研究を示している」(S. 225)と述べ、ついで Marx および Engels の諸著作から、Hegel の弁証法を唯一の科学的認識方法であることを明らかにし、Hegel が存在の発展と運動のなかで事物の自己運動の認識に到達し、「思弁的叙述の内部において事物自体を把握した叙述に到達したことは、かれがきわめて包括的な知識をもっており、哲学と経済学の本質的関連を認識しているからである。」(S. 227)と Lukács と同じ見解を表明している。そして Hegel の市民社会の分析を『法の哲学』の第 246 節を引用し、Lukács の見解をうらづけ、そこでもまた、Lukács と同じく「このように深い認識にもかかわらず、Hegel はかれの階級的環境の結果、資本主義的生産方法の本来の秘密をばくろし、賃労働と資本との敵対的諸矛盾の内的法則的関連をみいだすことに成功しなかった」(S. 230)と結論している。

Schleifstein<sup>(49)</sup>は、まず Behrens の論文をとりあげ、Behrens が Lukács の説明をはるかに超えて、Marx は Hegel の哲学とともに Hegel の経済学的観察から出発しなければならなかったという主張は、現在まで明らかにされた Marx および Engels の伝記的資料からみて誤りであることを指摘し、ついで Behrens による Hegel の経済学的研究のつぎのような定式化、「観念論的弁証法論者であったにもかかわらず Hegel は、労働、価値、貨幣の本質および資本家的生産過程の必然的発展傾向を把握することに成功した」ということは誤りであるとして全面的に批判している。Marx の『経済学・哲学草稿』における Hegel の労働把握「Hegel はただ抽象的精神労働を知るのみで、疎外された労働の問題のみせかけの解決をあたえたにすぎない」という一句を引用し、Hegel に労働の本質把握がないと断じ、「したがって Hegel に、かれ自身もたない功績を Marx の犠牲においてなぜあたえるのであるか。このことが文化的に、とくにまた哲学的なもの、批判的 Marx 的占有の意味での遺産ではありえない」(S. 717)と批判し、続いて Hegel の価値の本質・資本家生産過程の必然的傾向の把握にたいする Behrens の評価に言及し「この Marx における価値の本質は労働の 2 重性の認識によってはじめてはじまり、イギリス古典派経済学者もこの労働の 2 重分裂的性格を認識することができなかったことを明らかに

している。このことはすべて Behrens は私よりよく知っているであろう。しかしなぜかれは Hegel にのみ無制限に価値の本質把握を帰せしめようとするのか。そして Hegel にかれが資本家的発展傾向の把握に成功したという絶対に不当な光栄をあたえようとするのか。……かれは書こうとしていることにたいしてではなく書いたことにたいして批判されなければならない」(S. 718)と述べている。

続いて Lukács の書物の方法についての批判をつぎの 2 点に集約して述べている。「第 1 に、Lukács は、かれが自分で約束したこと、すなわち Hegel を『Marx への展望から観察し、解釈すること』を守っていないことである。第 2 に、西ヨーロッパのブルジョア革命の全時期（この時期のイデオロギーをふくめて）と社会主義革命の時期とのあいだに成立する根本的区別を明らかにせず、むしろ前者を抹殺していることである」(S. 719)。

第 1 の点について、Schleifstein は、Lukács が Hegel を Marx への展望からとりあつかわず、精々 Marx 主義の成立への展望からとりあつかっていると批判している。Lukács は Hegel を根本的に『経済学・哲学手稿』の Marx と対比しているが、それは Marx 主義を狭くすることである。というのは、『経済学・哲学手稿』は、けっして Marx の最後の言葉を示していないからである Marx の Hegel にたいする関係を、Marx 主義の完成の時期にかなり確実な役割を演じたが Marx 主義の内容をつくりださなかった外在化、疎外等々の諸範疇に還元することによって、部分的に Marx 主義の Hegel にたいする直接的近さの印象が強められ、あたかも Marx 主義のあらゆる問題と問題提起が Hegel 哲学において準備されているか、ないしは萌芽において述べられているように思われる。Hegel を Marx への展望から現実的・歴史的に分析することは、Hegel の諸見解と成熟した Marx 主義のそれ、『共産党宣言』、『資本論』、『反デューリング論』の Marx 主義および Lenin にいたる広汎なその発展との対照を必要とする」(S. 720)。

第 1 の点に結びついて Schleifstein の Lukács にたいする第 2 の批判は、Lukács がブルジョア革命の社会主義革命への基礎的対立、とくにそれがイデオロギーに生まれた対立を正しく把握していないこと、かれはまたここでもっぱら連続性 Kontinuität と移行 Übergang とを強調し、かくて 2 つの革命の世界史的区別をいちじろしく抹殺したと批判する。Lukács はその主張を Lenin のつぎの言葉「ブルジョア民主主義革命とプロレタリア革命とのあいだに万里の長城はない」ということに

その根拠をおいているけれども Lenin がその言葉をいかなる関連で述べているかをみるならば、Lukács の考えが誤りであることがわかる。Lenin はこの言葉を 1905—07 年のソヴィエト革命について語っているのであって、そこでは客観的諸条件が成熟していたためにブルジョア民主革命は同時にプロレタリア革命に移行することができたし、2 つの革命のあいだには万里の長城はありえないと語っているのである。しかし 1789—1848 年に至るブルジョア革命の時期にはそのような客観的諸条件が、すなわちプロレタリア革命が日程にのぼっていませんでしたのに、Lenin の言葉を図式的に適用することは正しくない。Lukács ではこの結果「ブルジョア革命における被抑圧者の運動のなかからプロレタリアートの階級闘争が成長したというモメントの背後に、相対的限界、結合その他のモメントの背後に、ブルジョア民主革命と社会主義革命の根本的・内容的対立がかくされている。しかしその対立こそが出发点を形成しなければならなかったのではあるけれども」(S. 723)。このことは「ブルジョア文化、批判的リアリズムの過大評価を示している」(S. 723)。

Höppner(52)は、Gropp の意図を「哲学史研究における観念論的方法にたいする正しい闘争である」(S. 288)と賛成し、Hegel の哲学は、その基礎に保守的・反動的の世界観をもっており、その結果、その弁証法は首尾一貫せず神秘化されており、そのことは理論の内容にもあらわれているとみ、Behrens, Lukács の理論をつぎのように批判している。「Schleifstein はすでに、労働・価値・貨幣の本質および資本家的生産の発展傾向の把握において、労働の本質はまったく明らかに資本主義の社会的根本関係、剰余価値関係をふくみ、『資本家的生産の必然的発展傾向』は労働階級の歴史的役割をふくんでいることを示した。それについてはまったく知らない Hegel は資本主義社会の諸矛盾の特定の現象形態——正しく一般に把握された貧民と富、働く者と所有者との、所有者の増加する集中と工場労働者の精神的奇形化および 2, 3 の対立——等々をみているが、かれはこの側面をイギリスのブルジョア経済学から継承したのである。しかしこれらの現象の本質、その合法則性、資本家的生産様式の内的諸矛盾は、せいぜいイギリス・ブルジョア経済学と同程度に、あるいはそれよりも劣って把握している。たとえば Hegel が、イギリス経済学にそのような様式では存在しなかった 2, 3 の認識に到達したとしても、このことは資本家的経済学の本質にふれるものではない。Marx の政治経済学の完成にとって Hegel の意味を過大評価することは、精神史的方法ではなく、哲学の階級的

性格の原理的問題が前景におかれるならば容易にさけることができたであろう。Gropp がこの政治経済学にたいする Hegel の意義を過大評価する、原理的側面を強調したことは正しい」(S. 293)と述べ、「Lukács のような Hegel 専門家さえ、綿密な源泉資料研究によって、私が指摘したことを確認するにとどまる。Lukács は Hegel について、かれが『Smith 経済学の特定の諸範疇に客観的にふくまれている諸矛盾を Smith の地平線をはるかに超えるところにある弁証法的意識の高さにまで高めた』と主張している。しかしこのプログラムにもとづいて遂行された研究の成果は『資本主義の運動への洞察のおそるべき高さ』についてのあらゆる約束にもかかわらず、きわめて貧弱なものとなっている。というのは Hegel は、Smith と同じく商品生産を絶対化し、労働を経済的に一貫して商品生産の一般的背後におこなわれる単なる労働過程としてのみ把握した。かれは、Marx のよく知られた言葉によれば、労働の肯定的側面のみをみている。Hegel がとくに資本主義的生産関係において認識したものは、多かれ少かれ現象的形態である。Hegel は分業と技術的進歩の関連をみ、発明を原因としてとりあげている。だがこのことはすでに空想的社会主義者のなかにもみられる。Hegel はまたこの進歩の 2 重的性格を対照している。労働はますます機械的・無精神的になる。機械は、人間が自然から奪えば奪うほど人間を抑圧する。しかしかれはその原因を資本主義のなかにも、主と奴隷の関係のなかにもみないで、機械の発明によって復讐をおこなう自然のなかにもみている。それはまさに神秘化された弁証法である。かれの眼は、一般にみえる現象をけっして超えるものではなかった。このことは富の集中と貧困の集中および両者の増大とのあいだの関連にあてはまる。そこでは Hegel は外面の運動を認識し、その内的合法則性を認識していない。というのは資本主義にたいする批判の一言すらみだすことができないからである。諸規制が全体を健全に維持するのに助けるであろう。移民と植民とが必要とされる。ここにおいて Hegel の弁証法は弁護論に転化している。Lukács はつぎのことを白状している『古典派理論における決定的モメント、すなわち産業生産における労働者の搾取を Hegel は把握しなかった』と。それでは『Smith の地平線をはるかに超える弁証法的意識のなかになにがのこるか。Hegel が Smith から継承した認識を概念の弁証法に包摂したという事実以外のなものでもない。それは Schleifstein が述べたように、Lukács はかれが約束したことを果していないことと同じである。それゆえ Behrens がかれの強い逸脱の正当化を Lukács

に依存する根拠はなくなっている」(S. 295)

Fetscher<sup>(53)</sup>は、Schleifstein の Lukács, Behrens 批判にたいして反批判をなし、Lukács の方法の正しさを擁護し、ついで Behrens が Hegel に「労働・価値および貨幣の本質および資本家生産方法の必然的發展傾向」を認識したことを帰せしめているという章句はたしかにあまりに大胆すぎるとしても、あまりに不合理ではないとして、『法の哲学』における Hegel の市民社会の分析をあげ、Behrens の見解を擁護している。

Lukács の方法にたいして Schleifstein の提起した非難は、Fetscher によれば、非歴史的観察にもとづいている。なぜなら Lukács は Hegel の弁証法の成立を、Marx 主義的・歴史的方法によって、すなわち思想の諸形態をその成立を可能ならしめた客観的諸条件に還元することによって明らかにしようとしたからである。そして Lukács の研究は Hegel の発展史を史的唯物論の立場から理解することを企てた唯一の研究である。しかるに Schleifstein は Hegel と Marx との関係を問題とし、Hegel の観念論的弁証法から Marx の唯物弁証法への発展の継続性と断絶性とを問題にしている。Schleifstein が中心においた問題を Lukács は直接にはとりあつかってはいないが、しかしかれの書物からこの問題についての明確な回答があたえられると、Fetscher は考える。すなわち Hegel の経済学的諸研究のなかには、現実的諸領域における弁証法的本質および発展法則を明らかにしようとする諸成果がふくまれており、それらは「(観念の枠を度外視すれば) 諸材料にたいする比較的大きい現実的接近」(S. 312)を示している。そしてこのような見地にたってみれば、Marx は Hegel の完成であった。Lukács の書物は、Hegel と Marx との関係についても間接ではあるがこの関連を明らかにした」功績を荷うものである(S. 312)。Fetscher はこのような Hegel の研究を、われわれが前章で示したように、なによりもまず労働の把握に、ついで資本主義社会における労働の在り方をあげ、ついで『法の哲学』における市民社会の分析をあげている。そして Lukács が『Marx への展望』からなした方法を擁護して、青年 Hegel と青年 Marx を対比することは、まだ原理的に保守的でなかった青年 Hegel において、弁証法的思惟の本来の機能が明らかにあらわれているかぎりにおいて、また Marx が、かれに知られていた成熟した Hegel (とくに『精神現象学』) の諸労作のこの『革命的側面』をとりあげたかぎりにおいて正しい。Marx が Hegel の初期の著作を知ることなく、かれの Hegel 化された時代に、これにたいする共感を示したとすならば、それは単にかれ

を Hegel の最も重要な弟子たらしめた天才にあるだけでなく、また(そして最終的にはとくに) Lukács によって示された客観的諸関連のなかにある」(S. 313)と結んでいる。

ついで Kuczynski<sup>(54)</sup>は、『経済学・哲学手稿』における Marx の Hegel 批判をとりあげた Карлушин<sup>(25)</sup>の論文をとりあげ、Marx の Hegel 評価は『精神現象学』には妥当するが、しかしこの把握を Hegel 一般に延長するときには正しくないとし、『法の哲学』における市民社会の分析(第243節、244節)を引用し「Hegel 以前に、また Hegel 以後、Marx 以前にはほかの誰もが労働の否定的性質をこのように明確に把握し、この認識に、社会的生産過程にたいする深い理解を証拠だてる巨大な表現をあたえたことになにびとも疑問をもつことはできないだろう」(S. 318)と述べ、「市民的・資本主義的社会問題の弁証法的分析において Marx 以前に、この表現における Hegel 以上に広く、Ricardo を超えたものはなかった」(S. 318)と Hegel の意義を高く評価している。

#### IV

以上、われわれは Hegel と古典派経済学との関連についての諸資料と諸研究をみ、あわせて、かれの市民社会の経済学的分析を展望してきた。そしてこの関連のなかで東ドイツにおける最近の Hegel 研究についての論争をスケッチしてきた。

それから明らかのように、最近の Hegel 研究は、すぐれて Hegel と古典派経済学との関連を重要視している。そして Lukács, Bülow におけるように、この関連を Adam Smith に求めている。われわれのみたように、Hegel は古典派経済学の礎石である労働の概念を社会学的・哲学的に深め、人間の歴史における労働の役割を明らかにしている。このことはたしかに Hegel の最大の功績である。しかし、Adam Smith と Hegel との結びつきを主張する論者は、Smith における分業・価値・貨幣の把握を Hegel が一見、踏襲していると思われる章句に、その根拠づけを求めているように思われる。しかしわたくしがかつて別稿「Hegel における古典派経済学の把握」で明らかにしたように、また第2章で Hegel の経済学研究を示すときに、暗示的に引用したように、Hegel と古典派経済学との関連を明らかにするためには、Hegel がその経済学的研究をおこなったさい、はじめて読み、Rosenkranz によって「Hegel の経済学的思想がそこに集約されている」といわれる James Steuart との経済学との対比が不可欠のように思われる。というのは Hegel が Smith と Steuart の、いずれか

ら強く影響を受けたかという問題は、単に文義的な解釈の問題に終るものではなくて、Hegel が古典派経済学から継承し、発展させたといわれる Hegel 自身の市民社会の把握の仕方を根本的に規定しているように思われるからである。一言でいえば Hegel の『諸欲望の相互依存の体系』である社会は単純商品生産者の世界であった。これは、また Stuart の経済学のたつ地盤でもあり、その経済学の構造を規定しているものでもあった。そこから Hegel の価値・貨幣の把握も縁由しているように思われる。すなわち、その労働把握は、生産過程での把握ではなく、生産物が商品流通に入るかぎりでの価値表現をうけるにすぎないという Stuart の把握に照応するものである。これに反して、Smith はマニファクチュア分業と社会的分業とを Stuart と同じく混同したとはいえ、資本制生産の特徴を、労働条件の所有者と非所有者との対立としてとらえ、剰余価値の一般的範疇に近づいており、そのうえで、資本制生産の分析をはじめたのであった。Hegel は、この Smith が Stuart を超ゆるものを継承していない。したがって、わたくしはかつて、Hegel の経済学的立場を「Hegel は資本制生産を単純商品生産と同一視し、資本制生産の本質的特徴が剰余価値の生産であることをみぬくことができなかった。個々の部分では Smith の経済学の摂取をあとづけることもできるであろうが本質的な構造からみて、Stuart の経済学ないしは Stuart と区別されざる Smith の学説のうえにたっていたということができよう」（別稿 D. 299）と規定した。

このように Hegel の経済学的研究の特徴を規定することができるならば、東ドイツでおこなわれている論争をみてゆくばあいの手がかりにできるように思われる。論争は東ドイツのおかれた政治的・文化的条件からみて、かなり性急な、しかも相反する2つの Hegel 解釈を提示しているけれども、わたくしには、かつて Hoffmeister がおこなったような Stuart と Smith の原典と Hegel の対応箇所を着実に調査し、そして全体としての対比をおこなうことによって、Hegel の経済学的研究の特徴を把握し、正しい位置づけが可能であるように思われる。ただ、わたくしとしては、うえに述べた Hegel の経済学上の立場から、Hegel に Smith, Ricardo を突破する功績をあたえることはできない。

### （学説史および経済史研究部門）

〔追記 この調査は、ドイツ語・英語文献については大野精三郎が、フランス語文献について津田内匠がそれぞれ担当した。そして全体執筆したのは大野である。調査の内容はあらかじめ部門の研究会で討議され、松川主任教授の指導をうけた〕

### I 主題についての文献

〔Hegel の諸著作・手稿（注1参照）を除く〕

1. Plechanow, G.: Zu Hegel's sechzigsten Todestag, in "Die Neue Zeit" 10. Jahrgang. 1 Band, No. 7. 8. 9., 1892. (笠信太郎訳『ヘーゲル論』1927)
2. Mayer, Karl=Moreau: *Hegels Sozialphilosophie*. Tübingen, 1910.
3. Friedrichs, Arno: *Klassische Philosophie und Wirtschaftswissenschaft. Untersuchungen zur Geschichte des deutschen Geisteslebens in neunzehnten Jahrhundert*. Gotha, 1913.
4. Bülow, Friedrich: *Die Entwicklung der Hegelschen Sozialphilosophie*. 1920.
5. Metzger, W.: *Gesellschaft, Recht und Staat in der Ethik des deutschen Idealismus*, 1917.
6. Rosenzweig, F.: *Hegel und der Staat*, 1920.
7. Wenke, Hans: *Hegels Theorie des objektiven Geistes*, 1927.
8. Marcuse, Herbert: *Reason and Revolution*, London & New York, 1941.
9. Hyppolite, Jean: *Genèse et structure de la Phénoménologie de l'esprit de Hegel*, Paris, 1946.
10. Hyppolite, Jean: *Introduction à la philosophie de l'histoire de Hegel*, Paris, 1947.
11. Lukács, Georg: *Der junge Hegel, über die Beziehungen von Dialektik und Ökonomie*, Zurich-Wien, 1948. *Der junge Hegel. Die Probleme der kapitalistischen Gesellschaft*. Berlin, 1954. (『出口勇蔵編『経済学と弁証法—ルカーチのヘーゲル研究—』1956年)
12. Cornu, Auguste: *Karl Marx et la pensée moderne. Contribution à l'étude de la formation du marxisme*, Paris, 1948.  
Cornu, Auguste: *Karl Marx und die Entwicklung des modernen Denkens*. Berlin, 1950. (青木靖三訳、『マルクスと近代思想—マルクス主義形成過程研究のために—』1956年)
13. Bülow, Friedrich: Hegel, der Historismus und die Dialektik. *Schmollers Jahrbuch* 69. Jahrg. I (1949). 70 (1950). II
14. Behrens, Fritz: Hegels ökonomische Auffassungen und Anschauungen, in *Wiss. Zs. d. Karl Marx-Universität*, Jg. 1952/53, Heft 9/10.
15. Behrens, Fritz: Zur Entwicklung der politischen Ökonomie beim jungen Marx. in *Zs. "Aufbau"*, Jg. 1953, Heft 5. (紹介, 宮鍋 幟, 「若きマルクスにおける経済学の発展」『一橋論双』第31巻第3号, 1954年)
16. Hyppolite, Jean: *Etudes sur Marx et Hegel*, Paris, 1955.
17. 赤松 要『ヘーゲル哲学と経済科学』1931年
18. 恒藤 恭「ヘーゲルによる自然法学批判について」『法の基本問題』1936年所収
19. 武市健人「ヘーゲルの社会倫理」岩波講座『倫理学』第5冊所収 1941年
20. 難波田春夫『スミス・ヘーゲル・マルクス—近代社

会の哲学』—1948年

21. 共田進午「ヘーゲルにおける労働の問題」『思想』1953年5号
22. 山中隆次「初期ヘーゲルの市民観—経済観を中心として」『一橋論双』35巻第2号1956年
23. 中埜肇「ヘーゲルに於ける自然法概念」『理想』297号1956年

II 東ドイツの哲学誌 *Deutsche Zeitschrift für Philosophie* 上の関係書および論文

- 1) 論文 Behrens の論文 (14) (15) に加え
24. Gropp, Rugard Ott: Die marxistischen dialektische Methode und ihr Gegensatz zur idealistischen Dialektik Hegels. I-II/II/1954.
25. Карпушин, В. А.: Разработка К. Марксом материалистической диалектики в “Экономическо-Философских рукописях” 1844 in Вопросы Философии 3. 1955. deutsch in “Sowjetwissenschaft, Gesellschaftswissenschaftliche Beiträge, Heft 2, 1956.
26. Сталин, И.В.: Анархизм или социализм? im Сочинения Том 1 (1901—1907). Москва 1946. (邦訳『スターリン全集』第1巻1952年)
27. Schdanow, A. A.: Kritische Bemerkungen zu dem Buch G. F. Alexandrow: Geschichte der westeuropäischen Philosophie. deutsch in, *Marxistische Forschungen*. Berlin, 1949.
28. Lukács, Georg: Zur philosophischen Entwicklung des jungen Marx. DZf. ph. 2/II/1954. (紹介平井俊彦「若きマルクスの哲学的発展について (1840—1844)」『経済論双』第77巻第5号, 1956年.)
- 2) 著書 上掲 Lukács (11) Cornu (12) の書物に加え
29. Bloch, Ernst: *Subjekt-Objekt*, Berlin, 1951.
30. Lango, B. M. G.: *Marxismus, Leninismus, Stalinismus*. Stuttgart, 1955.
31. Wetter, G. A.: *Der dialektische Materialismus*. Freiburg, 1953.
32. Mark, Siegfried: *Hegelismus und Marxismus*, 1929.
33. Schloz, H.: *Die Bedeutung der Hegelschen Philosophie für das philosophischen Denken der Gegenwart*, 1921.
34. Vogel, B.: *Hegels Gesellschaftsbegriff und seine geschichtliche Fortbildung durch Lorenz v. Stein,*

*Marx, Engels und Lassalle*. Berlin, 1925.

35. Plenge, J.: *Marx und Hegel*, 1911.
36. Helander, S.: *Marx und Hegel, Eine kritische Studie über sozialdemokratische Weltanschauung*. Jena, 1922.
37. Popitz, H.: *Der entfremdete Mensch. Zeitkritik und Geschichtsphilosophie des jungen Marx*. 1953. (書評, 宮鍋 轍, ハインリッヒ・ポピッツ「疎外された人間」, 『一橋論双』第33巻第5号, 1952年.)
38. Becker, Konrad: *Marx' philosophische Entwicklung, Sein Verhältnis zu Hegel*. Zurich, 1940.
39. Cornu, Auguste: *Karl Marx und Friedrich Engels, Leben und Werk*, Bd. I (1814—1844). Berlin, 1954.
40. Mende, G.: *Karl Marx' Entwicklung vom revolutionären Demokraten zum Kommunisten*, Berlin, 1954.
41. Вольная Советская Энциклопедия, Москва, Второе издание Том II. Германия. 1952. *Grosse Sowjetenzyklopädie, I Deutschland (philosophie. Hegel)*. Berlin, 1953.
42. Haym, Rudolf: *Hegel und seine Zeit*, Berlin, 1857.
- II. Diskussion: Über das Verhältnis des Marxismus zur Philosophie Hegels, in *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*.
43. Eröffnung durch einen Beitrag der Redaktion III/II/1954.
44. Behrens, Fritz IV/II/1954.
45. Cornu, Auguste IV/II/1954.
46. Schubardt, Wolfgang I/III/1955.
47. Albrecht, Erhard II/III/1955.
48. Mönke, Wolfgang II/III/1955.
49. Kommission für Kritik des Arbeiterkreises französischer kommunistischer Philosophen III/III/1955.
50. Schleifstein, Josef IV/III/1955.
51. Seidel, Helmut und Klaus, Gäbler II/IV/1956.
52. Höppner, Joachim III/IV/1956.
53. Fetscher, Iring III/IV/1956.
54. Kuczynski, Jürgen III/IV/1956.
55. Harich, Wolfgang V/IV/1956.
56. Toliatti, Palmiro V/IV/1956.